

金髪・ブルーアイがたくさんいるアメリカに行ってきた。毎年、アメリカ、もしくはアメリカ領に行っているが、今年の冬はあの武漢関連騒ぎで行かなかった、というか無理して行ってもウエルカム状態にはならなかっただろう。

革新的なキンジイへ

前回の続きになる。アイオワ州・デモイン近くのアンケニーでジョン・ディア・自走スプレーヤーの工場見学に行った。私が見ているのと同じモデルもあったが、排気ガスに尿素を吹きかけて大気汚染を軽減しましょうという発展型が主流になってきている。

退職者が案内するカートに乗っていると、この工場には1950年代にロシア（ソ連）から有名人が来たと言っていた。誰だ？となった。ガイドは「dbdmsksh」と発音したが、全くわからない。私はフルシチョフだと思い、手を上に下にと大太鼓を撃つように動かしたところ、ガイドは「そうだ、そいつだ！」となった。しかし少し進んだ壁のボードに書かれた文字には指揮棒が書いてあった。英語はわからなくてもボディランゲージで通じるといえるのは、まんざら嘘ではなさそう

だ。

その後ジョン・ディア・トラクター工場があるウォータールに3時間かけて向かうことになった。レンタカーで借りた7人乗りサバーバンの燃料計も寂しくなってきたので、I35（インターステイト35）のポークという小さい町でガソリンと飲み物やスナックを買った。

支払レジの金髪・ブルーアイ娘がニタニタしながら私たちグループにラブラビームを向けている。まさかね、ここはアイオワのド田舎だよ、そんなことはできないよな、困っちゃうな。勝負パンツ履いてないし……。心を落ち着かせてこう切り出した。「こんにちは！」。もちろん日本語で。すると、レジの金髪・ブルーアイ娘は「こんにちは！」と日本語で返事をしてくれた。私が「どこで日本語勉強したの？」と聞いたら「アニメ」と答えた。あまりにもカワイイ娘だったので、心の中で「オジサンたちと日本に行くかい？」と問いかけたが、もう一つのちっほけ

金髪・ブルーアイに会いに行けない!(3)

Vol.150



な常識が「止めときなさい」とクサビを打ちこんだ。先月号で紹介したジョン・ディア・トラクター工場を訪問した後、同じくアイオワ州のキンジイ（KINZEE）という会社に向かった。やっとな北海道で名前が売れてきた農機具メーカーだ。1963年に会社ができ、68年には当時のジョン・ディア・トラクターのエンジンを2倍のパワーに改造し、農家から

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール・ミヤイの憎まれ口通信

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作物する。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子ども時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。

Illustration by Kazushige Akita

高評価を得た。その後、600馬力のトラクターを作ったりと農業界の風雲児となる。今では走行時に90度回転するプランターや穀物搬送用カートの製造・販売で有名だ。

革新的な機械を製造・販売するキングのツアーを終えて次の目的地に向かおうとしたところ、ゲストパーキングに見覚えのある金髪・ブルーアイの集団がいた。先ほどジョーディア社のトラクター工場に出会ったスウェーデン農家家族と再会したのだ。彼らは3人の息子と父親でツアーをしていると言っていた。やはり我々と同じくケンタッキーのファームショーに向かうという。

その時にあることを思い出した。今は売却してしまったが、私は個人名義で長さ8.5m（中型バスと同じ長さ）の8人乗りのリモ（リムジン）を所有していた。ネットサーフィンしていた時に、私と同じ97年リンカーン・リモをスウェーデン農家も所有していることがわかった。私は思った。このリモの所有者は小作人根性を持っていないな。

このスウェーデン農家のリモと私のリモを先ほどのスウェーデン農家親子に見せた。「知らないか?」と尋ねたが、残念ながら「知らないわ」で終了。お互いツアーの成功を語つ

て次の目的地に向かった。

米大統領選の鍵を握る 現地の絶対的中間層

Yeahawiii さあ、祭りだ! よ

さこいだ! だんじりだ! カーニバルだ! ハロウィンだ! 廻って躍って足上げて、手も上げて、シメは腰振ってチークダンスだ、どうだこの野郎! ドナルド ジョントランプ大統領の再選が決まり、ハンカクサイ大陸国家を本格的にボコボコにして頂くうではないか。

国家を成り立たなくさせるのは簡単だ。正規の貿易をさせなければ良い。人民元通貨も交換拒否だ。そうすれば闇市場で円の価値が上がる。ただ、第二次大戦の時のように国民を抹殺させてはいけない。在中の日本企業が撤退して日本に戻る場合は補助金ではなく、撤退費用の償却を単年もしくは企業が希望する年度にできるようにしたり、法人税の減額あたりで対応しましょう。

徹底的にアメリカが叩くと中国は負けてしまい、その後はアメリカ追従を決め込むかもしれないね、日本がそうしたように。ところが、アメリカにしてみれば、中国は良い子だ。って思われるのは望ましくない。そこで政治的相対性理論が生まれ

る。アメリカは日本に関心を持たなくなる。そう、中国を徹底的に叩くことは日本の利益にならないのだ。中国の戦闘機100機、爆撃機

100機、中国版GPS衛星、アメリカ・カナダの孔子学院などを破壊して、中国バスポート所有者のアメリカ、カナダ入国を禁止して、チベットを独立させるくらいで止めておきましょう。もしかしてアメリカは中国を手なずけて、その先はロシアとの戦いに移行するかも。そうなるのはやはり日本が戦場になる可能性も否定できない。

だから、中国にはジワリジワリと真綿で締め上げるようにやりましょう。でも有用ではない人たちを殺してはいけませんよ。一世代前まで貧乏コイテタ国の文化など利用価値はない。例えば、いただきますの言葉もない中国、中国オヤジが真夏でやるへそ出しルックの北京ピキニ、手紙はトイレットペーパーの意味の中国語などの読み書きも含めてだ。10年前の話になるが、one, two, threeさえ理解できないイングリッシュの低理解度の国民から何を学べというのだろうか。

前回のアメリカ大統領選でトランプが勝つと紙面上、画面上で明言したのは、アメリカ生まれのコメンテーター木

村太郎さん、本誌元副編集長の浅川芳裕さんと、この私くらいだ。なぜか? 簡単だ。現地の中間層を見ているからだ。

日本のメディアはアメリカのメディアの人としか話さない。日本の政治家はアメリカの政治家と話す。日本の企業関係者はアメリカのそれと。彼らはアメリカの絶対的中間層ではなく、常識が偏り、現実主義者ではあるが基本的に物を作らない階層であり、お花畑主義者でもある。具体的に日本の農業に興味を持つ日本の政治家は何人いるのだろうか。まして日本の将来を決めるアメリカの農家と通訳を介さないで話せるマトモな農家は、国内に5人もいるのだろうか?

自分の子供に、どこかの国の文科省推薦の外国語の英語を学ばせて、イングリッシュでアメリカのマックで注文できないのに、優秀だと勘違いしている親たちは惨めだ。もっとかわいいそうなのはそんな使えない教育を信じている子供たちだ。国民全員にモノ作りを学ばせるために野に下り、援農政策再開だ!

ところでトランプ大統領はあなた、もしくは日本人に何か悪いことをしたか? さあ、残された時間は短い。トランプ大統領再選のために寄付するのは今がチャンスですよ。